江戸時代の国学者

塙保己一

はなわ　ほきいち

身にあまる恵（めぐみ）ある世はよむ文の
少なきのみやなげきなるらん

（写真）総検校塙保己一正装画像（塙記念館所蔵）

保己一誕生

塙保己一は、延享3年（1746）5月5日、現在の児玉町保木野に、父荻野宇兵衛、母きよの長男として生まれました。

幼名を寅之助といい、幼いころから物覚えのよい子供で、大人から本を読んでもらうとすぐに記憶してしまい、いつになっても忘れなかったと言われています。

しかし7歳の時に、病いがもとで視力を失ってしまいました。

さらに12歳の時には、自分をかわいがり、一生懸命目を治そうとしてくれた母が病気のために亡くなってしまいました。

保己一は悲しみにくれますが、くじけずに、やがて自分の将来について真剣に考えるようになりました。

（写真）保己一生家

江戸に出て、学問の道へ

（写真）保己一が江戸に出た際に持参した母手製の巾着（きんちゃく）（塙記念館所蔵）

15歳になった保己一は江戸出府を決意しました。

当時、江戸には、「太平記」を暗誦しそれを読み聞かせて名を成している目の不自由な人がいたそうです。それを聞いた保己一は、「わずか40巻の暗誦で人の世話にならずに妻子が養えるなら、自分にも不可能なことではない」と言ったという逸話が伝えられています。

江戸に出た保己一は、雨富須賀一検校（あめとみすがいちけんぎょう）の弟子になり、琵琶・琴・三絃や、はり・あんまなどの修業に入りましたが、保己一の学問に対する情熱とその才能を見抜いた雨富検校は、保己一を学問の道に進ませました。

国学・和歌を萩原宗固（はぎわらそうこ）に、漢学・日本神道を川島貴林（たかしげ）、律令を山岡浚明（まつあきら）に学ばせました。後には国学者賀茂真淵（かものまぶち）の指導を受けて、保己一の学問はますます深まっていきました。

和学講談所をひらく

天明3年（1783）、保己一は38歳で検校（旗本と同格）に進み、ますます学問に励み、天下に名の知れた学者になりました。

寛政5年（1793）、48歳の時には、国学研究の場として和学講談所の創設を願い出て許されました。この和学講談所は2年後には幕府直轄となり、保己一は国学の御用を務めることになりました。

ここで保己一は大勢の弟子たちに教えることになりましたが、なにしろ目の見える人でも難しい学問を、目の見えない人が教えるのですから、そのころの人びとは大変驚いたということです。

多くの有名な学者を輩出した和学講談所は、保己一が亡くなった後その子孫に引き継がれ、江戸幕府が崩壊するまでの約75年間続きました。

（写真）小林清親「塙保己一『源氏物語』講義の図」
（(社)温故学会所蔵）

群書類従の刊行

（写真）「群書類従（ぐんしょるいじゅう）」と版木（(社)温故学会所蔵）

保己一は、貴重な記録・文学作品等の古典籍が広く活用されることなく各所に放置され散逸していく実態を嘆き、安永8年（1779）に、そうした書物の収集と大叢書の刊行を決意しました。

中世以降の文献を集めて、古代の法制や年中行事、日記、紀行、合戦物、歌人の略伝などの25分野に分類、整理し、文政2年（1819）、670冊の版木本として完成させたのが「群書類従（ぐんしょるいじゅう）」です。刊行を決意してから実に41年間を費やした空前の一大事業でした。

「古典の宝庫」とも言われる「群書類従」は、日本文学や日本史等の研究を志す者にとって今なお欠かすことのできない貴重な資料となっています。

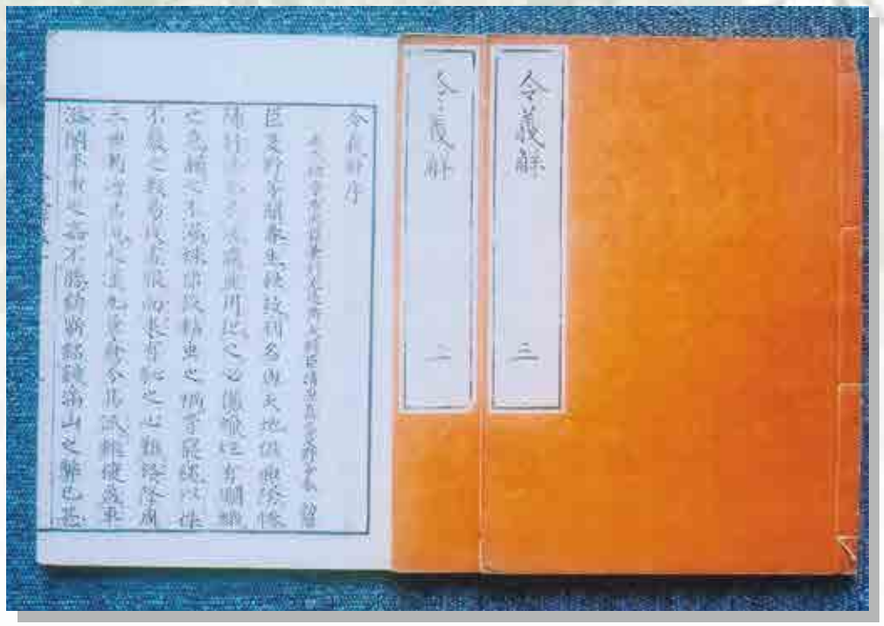
後世に残る偉業

保己一は「群書類従」を編さんする一方で、幕府をはじめ多方面からの要請を受けて貴重な書物を世に送り出しています。

天明5年（1785）以降、水戸藩の依頼により「源平盛衰記」や「大日本史」の校訂を、また、寛政12年（1800）には「令義解（りょうのぎげ）」（奈良時代の法典『養老令』の注釈書）の校訂を行っています。さらに、文化3年（1806）には、幕府から「史料」（『日本書紀』など六つの国史以降の実録）の編さんを指示され、同8年（1811）には、「蛍縄抄（けいようしょう）」（日本の対外国交渉の史料集）を幕府に献上しています。

そして、文政4年2月（1821）、盲人として最高位の総検校となり、同年9月、76歳の生涯を閉じました。

それから100年後の大正11年（1922）、保己一の偉業を顕彰し、後世に伝えるべく「温故学会」を創立した立役者が、同じ埼玉出身の偉人、渋沢栄一でした。



（写真）「令義解（りょうのぎげ）」（さいたま文学館所蔵）

ヘレン・ケラーと保己一

（写真）塙保己一のブロンズ像に手を触れるヘレン・ケラー

保己一が亡くなってから115年後の昭和12年（1937）4月、米国大統領の平和親書を携えたヘレン・ケラーがはじめて日本を訪れました。

ヘレン・ケラーは、幼くして病のために目が見えず、耳が聞こえず、重度の身体障害にもかかわらず、努力のすえ大学を卒業し、世界中の障害者の社会的地位向上と世界平和のために一生を捧げた女性です。

そのヘレン・ケラーが同年4月30日に浦和の埼玉会館で開かれた講演会で、次のように語りました。「私は特別な思いをもってこの埼玉県にやってきました。それは、私が心の支えとして、また人生の目標としてきた人物がこの埼玉出身の人だったからです。」

世界的偉人と讃えられているヘレン・ケラーが心の支えとし、人生の目標としたその人物こそ、塙保己一だったのです。

塙保己一年譜

	年齢（数え年）	
延享 3年（1746）		●5月5日、武蔵国児玉郡保木野村（現児玉町）に荻野宇兵衛、きよの長男として生まれる
宝暦 2年（1752）	7	●春、視力を失う
宝暦 7年（1757）	12	●母きよ没
宝暦10年（1760）	15	●江戸に出て、雨富須賀一検校の門人となる
宝暦11年（1761）	16	●萩原宗固の門に入り、国学や和歌を学び、また川島貴林に漢学や日本神道を学ぶ。その後、山岡浚明に法律を、品川の東禅寺の孝首座に医学を学ぶ
明和 3年（1766）	21	●雨富検校より旅費を受け、父とともに伊勢神宮に参り、ついで京都・大阪・須磨・明石・紀伊高野山等を60日ほど旅する。この時、京都・北野天満宮に参り、以後、自らの守護神とする
明和 6年（1769）	24	●宗固のすすめにより賀茂真淵の門に入り、「六国史（りっこくし）」等を学ぶ
安永 4年（1775）	30	●塙姓を称し、名を保己一にかえる
安永 8年（1779）	34	●「群書類従」の出版を決心し、天満宮に祈願する。以後千日間、毎日「般若心経」百巻を読んで、「群書類従」の完成を期す
天明 3年（1783）	38	●検校となる。和歌を日野資枝に学ぶ
天明 5年（1785）	40	●水戸徳川家に招かれ、「源平盛衰記」の校正に携わる。後に「大日本史」の校正にも携わる
天明 6年（1786）	41	●最初の出版物「今物語」を刊行。「群書類従」出版の大計画を実行に移す
寛政 4年（1792）	47	●麻布笄橋から出火した大火で江戸の過半が焼ける。保己一の家も罹災し、御茶の水の大屋四郎兵衛の家に移り住む
寛政 5年（1793）	48	●裏六番町に「和学講談所」を設け、会読を始める
寛政 6年（1794）	49	●寺社奉行より盲人の取締役を命ぜられ、その用向きで京都に上る
寛政 7年（1795）	50	●父宇兵衛没 ●「和学講談所」の永続手当として毎年50両を支給する旨が幕府より示される。また、「和学講談所」は以後、林大学頭が支配することとなる ●「群書類従」43冊が完成し幕府に献上する
文化12年（1815）	70	●将軍家斉に拝謁する。以後、毎年正月に拝謁することになる
文政 2年（1819）	74	●「群書類従」全670冊（現在は改訂を経て666冊）が完成する（出版を決意してから41年目）。「続群書類従」の目録2冊ができる
文政 4年（1821）	76	●2月、総検校となる ●9月12日、76歳で永眠